



第7号

昭和62年4月

古田武彦と古代史を研究する会

☎03-542-7456

〒104 東京都中央区銀座7-18-13 銀座スカイハイツ710号 ACT内

当会設立満五周年を迎えて

昭和五十七年一月十日、恵比寿会館に有志三十名程が参集し、「古田武彦と古代史を研究する会」が正式に発足して丸五年が経過しました。それまで東京に会がなかったというのも意外のようですが、五十一年第一回九州・志岐古田旅行会に参加した東京メンバーのうち七名の侍が希望した会組織化への熱情が五年後の五十六年十月の講演会「画期に立つ好太王碑」で、会員希望者百名の参加に結実した次第です。

いろいろな考えを持つ有志の方々の二時間以上に及ぶ激論(?)のあと、「古田先生を核として集まった古代史を研究する会とする」ことを確認し、「古田武彦と古代史を研究する会(通称へ東京古田会)」がスタートしました。

会の組織の強化は何といつても会員数が多いことにつぎるわけですが、初年度の百十九名から年々次第に増加し、六十年度には二百五十名に達し、現在もほぼ同数の会員数を維持しています。

しかし、会の運営に目を向けますと、いささか寂しい点は否めません。古田史学に共鳴した素人集団のため、事務局員も全員各自の仕事をかかえており、財政面での制約もあり、現実には、年二度の古田講演会、朝日トラベル主催による古田旅行会、そして年三回発行を目指している機関誌「東京古田会ニュース」の還元に限られています。

さて、六十二年度は会発足以来六

年目に入ったわけですが、今年度は会運営にも弾みをつけたいと事務局員一同張り切っております。

具体的には、現在まで単行本等に著作化されず、一般雑誌や地方新聞に掲載された古田論文を整理し、大阪の会発行の「市民の古代」とは趣を異にした、所謂「古田未稿集」の発刊計画です。

五月三十一日開催の定期総会において正式に皆さんにお計りいたします。つきましては、当会発展のために皆さんの忌憚のないご意見・ご要望をお待ちいたします。

定期講演会のご案内

日時 昭和62年5月31日(日)

午後1時30分～4時30分

(受付開始午後1時より)

場所 東京都勤労福祉会館集会所

住所 中央区新富1-13-14

電話 03-552-1911

交通 地下鉄日比谷線八丁堀駅下車 徒歩一分以内

演題 「日本古代史の中心問題」

講師 古田武彦氏

会費 千二百円(但し会員千円)

講演会終了後引き続き定期総会を開催。五時より懇談会を開きます。

講演会で話しつくせなかった点や最新情報につき興味のない話しがたくさん聞けそうです。奮ってご参加下さい。

(参加費) 二千円

昭和59年夏と60年夏の二度にわた

り「荒神山」から出土した三百五

八本の銅剣(?)、六個の銅鐸、銅矛

十六本の弥生時代青銅器は、古代出

雲辺境論に固執してきた定説学者に

は大変ショックであったにもか

かわらず、発見後三年になろうとす

る現在、自説を修正し、評価しな

した歴史学者の名前を私達は知ら

ない。近畿天皇家一元主義史観の亡

霊が現代歴史学界をいまだに支配

しているのである。

昭和四十四年、古田氏が「史学雑誌」に論文「邪馬登国」を世に問うて以来、それに続く著作により従来説と全く異なる新しい日本古代史像が構築されてきた。即ち、出雲→九州→大和という我が国中心権力圏の変遷であり、多元史観の妥当性である。古田氏の従来説への完膚なきまでの批判に対し、反対の立場で部分的な批判を展開した学者は若干いるものの古田学説と全面的に批判した学者は一人もいない。今日の学問の世界では全く異常なことであろう。

去る三月二十二日福岡市で九州王朝文化研究会主催、福岡市教育委員会、西日本新聞社、テレビ西日本後援により「邪馬登国より九州王朝」のシンポジウムが開催され、古田氏が講演されましたが、その際、氏は、今、日本古代史の中心問題は何かを従来講演会のメインテーマとして話しをされなかった「日本国の称号問題」や「卑弥呼」みかよつ姫」など皆さんご承知ながらも興味深い問題も取り入れながら、日本古代史の実像を改めて理解していただくたいという希望から今回の演題決定となりました。久し振りに(と云って氏は大変失礼!)層の凝らない、しかも古田説を改めて各自整理ができるすばらしい講演会が期待できます。

「必要にしてかつ十分」

世田谷区 舟根 智 視

「……のために必要にしてかつ十分なる論証が要求されよう」。古田先生の著書中の慣用句です。これに對して、安本美典さんでしたか、この句の使い方が當を失しているかと難詰していたそうです。

英語でいえばネセサリ・アンド・サフィシエントに當るこの句は元來数学用語で、現在は高校一年あたりで出て来る筈です。

「AならばB」が真であるとき、AをBの十分条件といいますが、AでなくともBになり得る訳ですが、とにかくAであれば十分です。逆にBはAの必要条件といいますが、なんとすれば、BでなければAにはなり得ないのですから。「AならばB」と「BならばA」双方が成り立つとき、一方は他方の必要十分条件であるといえます。「AとBは同値である」といいます。「AであるためにはBの成り立つことが必要かつ十分である」と表現されることもあり得ます。

Xの二乗が4より大きくなるためにはXが2より大きければ十分です。また、Xの二乗が4より大きくなるためにはXの絶対値が2より大きいことが必要かつ十分です。

高校生的な話で失礼しましたが、安本さんは、このような数学的な意味での使い方を念頭に置いていたのではないのでしょうか。しかし、これは牽強附会というものです。なぜなら、数学の世界でなら安本さんの言いが、事は歴史学の世界です。歴史学上の命題は数学的な対象物には

なり得ないので、古田さんの使用法は、単に慣用語句として借用したに過ぎないことは明らかです。これと矛盾とかの用語も使えなくなりません。

有名な古田命題「魏・西晋朝は短里を採用していた」ととってみましょう。これを証明するにはどうすればよいのでしょうか。三国志内に短里を採用する旨の詔勅があるとか、あるいは金板でも出土するとかなら、それこそ十分でありましょう。それが駄目なのですから、論理的には証明不可能ということになります。少なくとも、三国志等の同時代文献に出てくるすべての里単位が短里であることを証明する「必要」があります。しかしながら、これもまた不可能です。そこで彼のとった方法は、これらのうち、明白に短里であるものがいくつか存在すること、および残りもすべて短里で解釈し得ることの論証でした。これでもか、これでもかと短里の実例を積み重ねられた彼の努力には頭が下がります。これに對し、短里説を否定したい論者にとつては、事は簡単です。一例でもよいから、これらの中に、明白に長里でなければならぬものがあることを示せばよいのです。それが現在まで一人もできていない。よって、私は、歴史学上の論証として既に「十分」であると思うのです。それにしても「必要にしてかつ十分」という用語のもつ迫力はどうでしょう。古田さんには、これからも必要なだけ十分に使って貰いたいものです。

鉄の鑄雜話

世田谷区 山本 真之助

現在から考えると鉄と云う金属は日常生活に密着したものであるけれども古代住居遺跡等から出土する事が極めて少ないので一般庶民には貴重なものでも普及されていなかったと思われ。墓所の副葬品として出土する方が多いのであるから権力者用の貴重品であったに相違ない。鉄は鑄るし、鑄るとポロポロになり土砂に混じってしまう事も理由にはなるが鉄の考古学的な編年体系が出来上がっていない事は残念である。つまり出土の鉄器から年代が推定出来ないで一緒に出土した土器等から年代を推定している。製鉄遺跡と称するものもずいぶんとあるけれど、土が主体であり存在する場所、又は技術に依るか、資本力に依るか、大きさも大小色々で科学的な説明がつきにくい。俗に謂うたたら製鉄。中国地方に多い永代たたら等十六世紀以降はまあまあ判然としているのは幸いだ。夫以前鉄の草分け時代はさっぱりわかっていないのが現状と言える。我國には処々方々に砂鉄が存在するので、之を原料として製鉄が行われたとする説が有力である。所謂舞草刀とか近江鉄とか近隣に鉄礦石の出る所もあるし、又朝鮮半島からの鉄材の移入も考えられる。然し私も砂鉄説である。砂鉄は鉄の酸化物の細粒である。夫が木炭等で加熱されて炭素に依り還元されると鉄粒になる。之は海綿鉄の製法と同じである。その細粒がお互にくっ付き合うと鉄の塊になり之は鍛造が可能であり硬い石でたたいても多少の変形をさ

せる事が出来工具の初めの形となる。今日日本の原料として之の拡大したものと云える。玉鋼を手近にある拡大鏡で覗いて御覧なさい。硫酸つまみりガラス状の皮膜に覆われた鉄粒の塊であることが見える。この事が鍛接即ち百鍊の鉄の根元であり折り返し鍊える事に相成る。安来市の和鋼記念館に依り一博士が明治の半ばに蒐集された玉鋼があるが百年もたつて金属色あざやかで錆が出ていない。ガラス状の皮膜の為に空気に触れないからである。此の大戦中に造られた靖国たたら玉鋼も同所にたくさんあるが金属光沢をたたえていない。古代製鉄は現代で言えば海綿鉄の製造と同じ要領であつたらう。そして技術の進歩殊に送風技術の工夫発達で温度が高く得られて塊がだんだん大きく使い頃になつて行つたのではないかと思つてゐる。高温を得て炭素も高く出来て、完全熔解して鑄鉄を得て鑄物が始まる。近世では鋼用のたたらと鑄物用鉄用のたたらと専門化してゐる。鉤押し銃押しと云うのは其の区別と考えられる。然し変化の年表は出来ていない。この銃押し鉤押しその他に近世の事であるが日本刀の古刀と新刀の相違が鉄の歴史の上では興味ある事で刀劍鑑定の上では明瞭であるが技術的にはよくわからない。古刀は再現出来ないのである。鍛刀技術の相違か原料である地鉄が原因か兎に角十六世紀頃に製鉄技術の大変化があつて地鉄が變つたと云う説もある。高清水博士の報告(考古学論攷九冊)に依ると奈良の古墳前期(四世

紀) 中期後期の刀剣槍先矛鐵馬具等約百点の化学組成を統計的に検討した結果前期から中期後期と時代が下るに従いP Co Ni Cu等の微量不純物量が多くなる傾向が認められたと云う。私は之は原料鉱石が異なったのか製鉄技術の変化かつまり製鉄温度の関係従って生産量への影響等考えられると思つてゐる。つまり製鉄技術の变化と云うか進歩が考えられる。

先日理髪店で明日香風(十九号)と云う季刊誌を垣間見たら山陽女子高校の西川宏先生が吉備地方の製鉄に就いて長い論文を発表されていた。弥生中期の原料に沼鉄を紹介したり六世紀の鉄穴流しに就き記述され、殊に律令下の鉄に就いて詳しく書かれてゐるようだった。ゆっくり拝見出来なくて惜しかったが、こうした先生等の之からの研究が大いに期待されてうれしかった。

鉄の錆には黒錆と赤錆とがある。黒錆は粒子が細かく鉄の肌を美しく見せ鑑賞の対象として大切である。黒錆は鉄を二、三〇〇度に熱するか錆つけ薬を塗って錆を出す。錆つけされた黒錆は時間がたつにつれて深くなり磨かれると粒子が細かになる性質をもつてゐるし赤錆をつけない役割もある。錆はワイヤーブラシややすり等で簡単に落ちるが黒錆を落さずには赤錆を落とすには動物の骨や角でこするのが一番である。仕上は水洗いして水洗いした木綿かピロッドの布で軽く三、四百回も拭えば自然の鉄色が出てくるものである。以上

鉄の豆知識
 (「鉄の古民芸」砂塚徳三 小崎浩共著一二七頁)

「古代未来塾」をつくる

港区 いき 一郎

九州八年の生活のあと、東京に移つて、研究会を二本立てにししようと考へた。ヤマタイ国研究会は九州と九州にふたつあつていいのである。九州では古田さんの会を発足させ、その後、九州王朝文化研究会や卑弥呼研究会など分岐し、伸展してゐる。たまたま、三田の港勤労福祉会館はK大の近くでもあり、「塾」の発想は自然に生まれた。が、塾長・塾頭のいる会ではない。また、年間会費をとらないで、その都度五百円を集めることにした。多くの人が古代史の会でも複数の会に入つており、



会費一括支払いがきつと思つてからであつた。

十カ月をへて、会は漸く、四十人ほどの会と七、八人の会を平行して運営することができるようになつた。半年の間に二回以上来る人が七十人ほどである。これは、朝日新聞の「にゆうす・らうんじ」(七月十一日刊)に取り上げられたから増えたためといつてよい。

事務局長は愚妻が務めていて、この春から「通信」を発行しようと思つてゐる。

「塾」と名づけた部分で独断的になるのもお許しいただきたいという意味をふくめてある。民放(九州朝

日放送)退職以来、私の本職は文筆業、評論である。專業の自由と難しさを味わつてゐる。

古代史についての考へ方は、一、中韓史料を軸に古代日本史を編成すること。

二、政権分析などを補い、「記紀ばなれ」を試みる。

三、考古学を学ぶ

という基本である。いわゆる解釈中心の歴史から、分析、実証へと努めたいということにならう。本来、アマチュアは総論的なことをやると損らしい。各論につつこんだ方が有利である。しかし、十年・十五年とねばつてゐると各論でも見えてくるものが出てくるようだ。

昨八六年は金沢へ二度行つた、母校の百年祭もあつたからだ。

そこで、私は「北陸文身国説」を裏付ける能登・真脇遺跡の土製仮面の存在を知つた。朝日新聞向平記者の指摘である。時代は二千年前後を隔ててゐるが、三筋の文身(入れ墨)がくつきりと出ていた。あまりにも「梁書」、「南史」さらに「通典」の文身国条に一致してゐるので気味がある。いくらいだ。参考までに土偶をのぞく土面は全国的に出土例は十五例ほどしかない。

目下、都心求貧の生活である。自転車と徒歩、足腰は自強術体操で鍛えてゐる。農耕をやりたいが三田では無理な話だ。もと国会記者としては永田町の政治ドラマにも無関心ではいられない。

古代を訪ねて未来を求めるといふところか、「古代未来塾・通信」は八ページでスタートするが、東京、ど

まんなかの哀歎がにじみでることと思ふ。季刊、年二千円。振替東京211-3970 古代未来塾

ご指導をお願いする。

「好太王碑論争の解明」改ざん説を否定する

中野区 鈴木 正勝

61年11月発行。著者は「市民の古代研究会」事務局長の藤田友治氏。古田説の優れた理解者である。

四二六頁の分厚い著書であることと、好太王碑問題は古田氏の一連の著者で素人なりに一応理解済みという気持ちも手伝い、読み始めるまでいささか抵抗感がなかつた訳ではなかつた。しかし、読了後の卒直な感じ「好太王碑問題に關しては本書を越えるものはないか」と思ふほどすばらしい出来ばえであつた。

一、好太王碑は好太王生前の数々の「偉大な業績」を示すため、戦争の時期、原因、結果、戦勝品を明記し、さらに守墓人烟戸の制度を明確にするために建立されたものである。

日本・中国・朝鮮各国の研究者間に従来から全く異なる見解があり、また古田説の出現により「日本の倭」大和政権の日本の統一国家形成論がその存在価値を失つたにもかかわらず依然として自らの説に拘わり続けるいわゆる定説派学者一色の我が国古代史学界は真実という名の追求を全く放棄してしまつたのであろうか。

この現実には歴史教育にたずさわることある教師達に戸迷いを与え、それ

を学ぶ生徒達にも混乱を起している。一、本書は、一九七四年発行の佐伯有清氏の名著「研究史・広開土王碑」の研究業績を紹介しながら、その後、改ざん説、論争の成果を踏まえ、ごく最新の論文にも説明・批判を加えた集大成書である。

改ざん説に関わる李・古田論争が古田・藤田両氏の現地調査で決着がついた筈の碑文解釈(改ざん論争の争点については本文一六八―一六九頁参照)につき著者のとった立場は簡記すれば

(一)、従来使われた碑文の拓本・釈本・写真を出る限り集め比較・検討をしたこと(この検討作業過程の中で茨木東高校生徒との共同作業で、従来どちらかといえば軽視されていた「大東急記念文庫拓本」の復元に成功、その資料価値の高さを証明したことは特筆に値する)

(二)、碑文そのものを自分で確かめ、欠字ないしは不明字については「知らない」という立場に徹し、従来研究者達が勝手に補い解釈してきた諸説をあらゆる角度から客観的に批判したこと。

(三)、好太王の存在した四―五世紀と同時代の史実を扱った中国文献や三國史記等朝鮮側資料の先入観なしの解釈により、当時の碑文内容をめぐる政治情勢を正確に把握し、碑文解釈の際のバックボーンとしたこと(この点については、やはり古田説に大いに助けられた)

このことにより、著者は古田説に依拠しつつも、改めて分析しなおし発展させ、事実上碑文論争に終止符を打たせたとはいえよう。

本書の最後に古田氏が解説をしているが、その中で氏は藤田氏の功績として次の二点を挙げている。

(イ) 碑作成上の最終の叙述目標であり、古田氏ほか若干の研究者以外看過されてきた「守墓人」問題に光を与えたこと。

(ロ) 碑文解釈上最大のポイントの一つである「倭」とは何かという問題に正面から取り組み、今後この点について反論はしにくいのではないかなと思われる位説得ある論理を展開したこと。

しかしながら、それでもあらゆる国の研究者達から本書に部分的批判を加えるか、あるいは全く無視した形で碑文解釈論文が発表されると思う。その際、本書を座右の書として蔵書に加えておけば大変参考になると思う。

専門書に近いため値段が三二〇〇円といささか高いが、内容のすばらしさと飲ん兵衛流の「一回の飲み代」と考えれば、あるいは安い買物かと思う。是非一度読んでいただきたい(発行所「新泉社」。住所は文京区本郷二―十五―二十。電話番号は〇三―八一―二一―六六二)

絆

(アマ族の対島漂着説のルーツの謎を追う)

―原始船で東支那海渡海を提唱―
鎌倉市 関谷 博

三世紀編纂の中国史書魏志外伝倭人条によると、倭人は帯方東南の大海の中にあり、旧は百余国、漢の時に朝見するものあり、今使訳通ずる所は三十国とある。所謂邪馬台国の「当時」の直接の勢力圏は筑紫(九州)に限られる様である。「旧」は即ち、

それ以前は百余国であるから勢力圏が縮小された事になる。一方吾國の古文書の古事記の前段の「国生み神話」は主人公の天孫海人族即ちアマ族の企画担当責任者のイザナギ(神)は海洋民であるから海(海岸)からの二度に亘る領土調査探検で得た結論は十四の大小の島である。即ち日本海の佐渡島から瀬戸内の淡路島、四國等総て黒潮が直接岸を洗う地帯で海洋民のアマ族の渡来のルーツに直接関係がある事がわかる。更にこの神話の国々は江南(揚子江)から一挙に水先案内をする様に北東方に向って黒潮に従って①天高屋(男女群島)②天之忍男(五島)③天比登都柱(老岐)④天之挾手依比亮(対島)⑤天之忍許呂別(隠岐)と続く。之等の島々は「またの名」を持つ重要な島であると「記」は説くが何故重要かとか戦争の為の武器とか色々憶測するが天高屋や天之忍男の真の重要性の説明には不足する。まして日本列島の政権が其後の韓半島との深い係り合いを考えると尚の事その接点には程遠いのである。「記」の時代算定は判然としないが私は「旧は百余国」と「大小十四の島々」とが時限は違うが重なり合う様に思えてならない。

日本列島は水稲流入以後、急激に人口が関東以北から移動して稲作適地の西部に多くなる。筑紫時代到来である。古代国家も芽生える。近畿天皇家の延源と思われる倭国は大方の考え方は、筑紫(九州)から東征した事に傾いているが、九州の王朝が何処から来たかはその経路(ルーツ)は判然としない。

④三世紀以前よりあった九州南部のクナ国が四世紀に邪馬台国を征服して東上して大和に王朝を開いた。◎崇神を主軸とす騎馬民族が任那を根拠として海を渡り北九州に進出、以後応神で北九州から近畿へ上り建国した。◎晉書倭人伝の倭人が「自ら太伯の後」と云う伝承を重く見て、日本列島の倭人は東夷の江南の民族であるか越の遺民であると云う説として邪馬台国、葛城王朝、大和王朝と続くと言う。◎対島比田勝から天降りして日向高千穂に移住以後東征して大和へ定住、建國等々諸程の考え方がある。

勿論凡てこの場合韓半島から移動して来たと考えるのが一般的である。

昭

和六十二年度 年会費納入のお願い(年会費千円)

当会も、発足後、今年で満五年を迎えました。

その間、会員の入れ替えはありましたが、お陰様で二百五十名を擁する親睦団体としては大変な組織に発展しており、財政的にも若干の余裕もあり、会費は会発足以来千円を維持しております。

つきましては、ここに郵便振替用紙を同封いたしましたので、最寄りの郵便局よりお振り込み願います。

次回の「古田会ニュース」は八月に発行する予定ですが、なかなか原稿が集まらず四苦八苦しております。先生への質問、随筆、研究論文、紀行文など、ぜひご投稿下さい。

原稿は、一段が縦十六字、横三十九行をめやすにお願いします。

事務局

事務局